地域と文化

―沖縄をみなおすために―

【復刻版】全４巻・別冊１

『地域と文化』は、一九八〇年八月の第一号から一九九六年八月の第九五号まで刊行された雑誌である。第一号の編集委員は池宮正治、上江洲均、我部政男、宜保栄治郎、高良倉吉、仲地哲夫であり、第二四号からは真栄城守定が名を連ねた。

「発刊にあたって」（池宮正治）には、「地域の文化と歴史に関する〝広場〟と言った冊子にしたいと思う」とあるように、沖縄の論文から共同研究の成果、資料紹介やエッセイ、短信など多種多彩で、同時に沖縄島北部・宮古・八重山・奄美など多くの地域が頻繁に登場する。

平均二六頁程度の小冊子であったためか、現在からみても重要な情報が収録されていながら、所蔵されている研究機関はわずかであった。

沖縄文化研究の利便性をより高めるために、本復刻版を供するものである。

地域と文化
沖縄をみなおすために
第１号
1980・8・15

◎原本発行＝南西印刷出版部（ひるぎ社）
◎原本発行年月＝１９８０年８月～１９９６年８月
◎解　説＝高良倉吉
◎推　薦＝安里　進・大田静男

地域と文化
沖縄をみなおすために
第71号
1992・6・15

◎体　裁＝Ｂ５判・上製・総１、９５６頁
◎別　冊＝解説（高良倉吉）・総目次・索引
（別冊のみ分売可＝本体１、０００円＋税
ISBN978-4-8350-8056-7）
◎揃 定 価＝本体８４、０００円＋税
ISBN978-4-8350-8050-5
◎刊　行＝２０１７年７月

不二出版

沖縄研究の重要文献にして地域情報の宝庫

安里 進（前沖縄県立博物館・美術館長）

『地域と文化』は、一九八〇～九六年にひるぎ社が隔月刊行した沖縄の地域と歴史・文化の総合学術雑誌である。全九五号、総頁は二千頁に近い。多彩な執筆者による大量の論考は、地域情報の宝庫であり、今でも琉球・沖縄研究に知的刺激を与える重要文献だ。

収録論考は、琉球・沖縄の各時代・各地域の歴史を中心に、文学、民俗学、自然科学、書道、数学史、科学技術など多方面にわたり、話題も沖縄・日本から世界各地におよんでいる。また、大小の論文だけでなく、エッセイや旅行記による情報紹介などバラエティにも富み、なかには白熱した議論もあって読んでいて飽きることがない。

この雑誌は、バブル期をはさんだ時期に刊行された。当時は、多くの自治体が市町村史編纂事業に取り組み、若手・中堅研究者を中心に地域史研究の熱気がみなぎっていた。こうした時代を背景に、ひるぎ社と六名の編集委員が提供した『地域と文化』を舞台にして、さまざまな分野の研究者が一六年間にわたり投稿し議論を交わしてつくりあげた〈時代の成果〉と評すべき文献でもある。

しかし、重要文献にもかかわらずこの雑誌を所蔵する機関はそう多くない。また、個人所蔵でも欠号があったりする。このたびの復刻出版を機に、この重要文献が全国の図書館や研究機関に収蔵され、多くの研究者に活用されることを期待したい。

『復刻版 地域と文化』を推薦します

大田静男（八重山郷土史家）

沖縄は今も政治の嵐が激しく吹き荒れている。

当然のことだ。

しかし、他の分野における潮流は確実に変化している。

一九八〇年沖縄の南西印刷出版部（ひるぎ社）の編集長富川益郎の呼びかけで池宮正治、上江洲均、我部政男、宜保栄治郎、高良倉吉、仲地哲夫ら新進気鋭の若手研究者たちが参集し『地域と文化』を立ち上げた。

池宮正治は「難解なギルド社会の、内向きの雑誌ではなく、さりとてディレッタントの気軽な知識欲と空想でもなく、ひたすら自らの立脚する地域に目を据えて、その地域の、よってきたった歴史と豊かな文化に学び、それらを各自の関心から科学的にアプローチして、共通の認識に高めるといった、いわば地域の文化と歴史に関する〝広場〟と言った冊子にしたいと思う」（「発刊にあたって」）と述べている。

一九八〇年八月一五日第一号を発刊した。年六回の刊行をめざした。B5判の平均二六頁の小冊子には、大学の研究者や地域研究者による沖縄、奄美、先島の歴史、民俗、文学など斬新な研究成果が次々発表された。

しかし、一九九六年八月第九五号を持って一六年の幕を閉じた。突如会社が倒産したためである。

しかし、『地域と文化』が果たした役割は大きい。

地域の研究者を育て各分野におけるレベルを高めた功績はだれもが認めることだろう。

現在では通史となっているものもあれば、今なお研究課題もある。原本を失った史料（資料）もある。

その多彩な論文は今も輝きを放っている。

▼第87号

宮古島の「ミジィヌムアブ」（ドリーネ）と地下水

仲間勇栄

一　新たな問題視角

宮古島上水道企業団は、一九九四年の一月二十一日から夜間八時間、同二月十五日から夜間十時間の断水に踏み切った。その理由として、九三年以来、四〇〇日以上に及ぶ小雨傾向と、水源地の貯水量の減少があげられている。過去、一部の地域の長期断水や小規模の時限断水はあったものの、このような長時間、かも宮古島全域にわたる断水は、めての出来事だ、という。

小雨傾向による水源地の貯水量が、長期断水の主な原因としてあげられている。しかし、宮古島の地上部ではつてない大規模な開発によって、ぎ取られ、地下に水を供給するヌムアブ」midizimuabu（地質学的ドリーネ）などがつぶされて、地下の水の循環に、何か異変が起こるのではないだろうか。

このような疑問に触発されて、四年の四月十二日～十五日、五月二十三日～二十四日、八月二十三日～二十四日の三回にわたって、宮古島の「ミジィヌムアブ」の実態について、生態民俗学的な調査を試みた。

宮古島の地下水とドリーネの重要な関係については、今から十一年前、「宮古毎日新聞」（八三年一月二十五日付）の特集記事で取り上げられたことがある

▼第34号

沖縄の村遊び(二)　宜野座村松田の村踊り

宜保栄治郎

一、期日　旧八月十五日

二、場所　「遊び毛」　注アサギナーは別

三、名称　「八月の十五夜遊び」または単に「遊び」とも称す

四、はじめに

沖縄諸島、宮古の多良間島、八重山諸島、奄美諸島で旧暦八月十五日の前後に「八月踊り」「十五夜遊び」「村遊び」「村踊り」「村芝居」「豊年踊り」等の名称で盛んに村の守護神であるお嶽で、奉納芸能がおこなわれている。場所はアサギ、アシビナー、オンなどとよばれる村の鎮守の森のなかにある広場で目的は今年の稲等の豊作にたいする神への感謝と来年の予祝祈願をかねている。総てを村人が取り仕切る自演の芸能である祭とからみあった未分化の芸能から琉球王府で作られた格調の高い御冠船芸能まで種々雑多な芸能が演ぜられており村遊びは文字通り芸能の宝庫である。

松田区は間切時代から戦前まで古知屋と称されていたが、戦後松田と字名を改称、人口一、〇七六名で沖縄北部地域では大きな村落の方である。特に芸能に対して区は伝統的に力をいれており、古い組踊台本が保存されている。昭和四五年真境名由康、当間一郎氏と一緒に調査したことがあり今回は二度目である。

▼第73号

大浦村のユーニアーグについて

―アーグの解釈と紹介―

岡本恵昭

大浦部落の旧正月に歌われ踊られる「ユーニアーグ」を紹介します。「ユーニ」とは、正月二日から始まる「ガンニー」（ユーニ）と呼ばれる祭祀行事で、村のサスンマ十二名、マドウマ四十名が、サスンマ達の家々を回り歩く、年始まりの壽ほめの神事であります。村の神司達の家々に集い、そこのマウ神に一年の新しい霊威づけをしていく、共に、神の家庭のカリイを[illegible]としている年中行事[illegible]村の神役が家々の[illegible]の神のセジづけを祝[illegible]んで唱和することで[illegible]づけているものと解[illegible]す。ユーニは、村の[illegible]円陣を組んで時計[illegible]でこで歌われるアー[illegible]呼んでいます。大浦[illegible]月のアーグ」、「ナカヤーマーボ」、「ンカイダキ」、「ウブグムイ」、以上の四曲がユーニアーグとして歌われます。ユーニは、踊りをともないます。円陣を組んだ踊りで、手は左右の人につなぎ、踊りは足のみがリズムをとって廻ります。これをマーズユーニとか、マーユーニブドゥペと呼びます。狩俣のトゥクルフンのマーユーニはまさにこの踊りです。旧正月の十六日（ヤーズ・ヨーズ）にも、三日

▼第69号

―大学生のレポート―　いま、若者の平和意識について

石原昌家

大学で社会学を講義していくなかで、受講生に「戦争と平和の社会学」についてレポートさせた。課題本として小生の著した『証言・沖縄戦―戦場の光景―』（青木書店）をはじめ、沖縄戦関係の新聞連載記事などを読ませたり、講義の時間を割き、フィリピン人の戦争体験について通訳付きで直接聴かせたりしたうえで、書かせたものである。ひるぎ社編集部の依頼をうけ、六名のレポートを掲載してあるが、それをこのような形で公にすることはまったく考えていなかったので、その分については本人たちの了解を得ている。

二百余名のレポートを精読していくと、小学時代から今日まで「戦争と平和」について、どのように考えてきているので、その全体の内容を大づかみで紹介せざるを得ない。

まず、強く感じたことは、「戦争体験の風化」「風化の深層」などという言葉は、私が常々思っていた通り皮相的な単なる「マスコミ用語」に過ぎなかったということである。私は終戦の年、台湾で四歳だったので、まったく戦争のことを記憶していないため、実質的には彼らと同じ「戦争を知らない世代」とみなしてもよい。そして戦後十五年目がかれらと同じ大学生の年齢だったが、戦後四十六年目のかれらのレポートを読んでいると、当時の私（達）にはまったく考えられないような「戦争と平和について」の深い認識を抱いていることが明白であり、その差異を痛感した次第である。私

関連図書

四群島の各教員団体機関誌（一九四七年～一九五三年）

占領下の奄美・琉球における教員団体関係史料集成

全7巻・別冊1

編　集＝（代表）藤澤健一・近藤健一郎・櫻澤　誠・高橋順子・戸邉秀明

別　冊＝解説・総目次・総索引・附表（藤澤健一・近藤健一郎・櫻澤誠・高橋順子・戸邉秀明・田中萌葵）

体　裁＝A4判・上製・総約2、440頁

推　薦＝弓削政己・仲宗根將二・大田静男・川井勇

揃定価＝本体196、000円＋税

米軍統治下の奄美・琉球では、日本国憲法が定めた集会や結社、出版など表現の自由が規制され、検閲の禁止、通信の秘密（二一条）は実質的には保障されなかった。その背景には、基地の安定確保と反共を政策とした軍政府の強権があった。各教員団体は、こうした制約下、自らの意見を表明・共有化するための機関誌を刊行していた。『教育大島』『教育と文化』（奄美群島）、『宮古教育』『教育時報』（宮古群島）、『新世代』（八重山群島）、『新教育』（沖縄群島）である。いずれも四七年以降に軍政府の認可を受けて創刊され、簡易な冊子として会員を中心に配布されていた。新たな史料発掘と精細な考証の成果にもとづく史料集成。

おきなわ社　発行（一九五〇年～一九五五年刊）

おきなわ

全6巻・別冊1

別　冊＝解説（仲程昌徳・松下博文・粟国恭子・酒井直子）・総目次（新城栄徳）・索引

体　裁＝A5判・上製・総2、538頁

推　薦＝我部政男・高橋敏夫

揃定価＝本体96、000円＋税

一九五〇年四月、「沖縄、日本、或いは海外にあって郷土の再建をひたすら祈り、各々その立場々々から力をつくしている人々の心の慰めとなり、力の泉たらんことを期して「おきなわ」が生れました」（本誌創刊号編集後記より）。気宇壮大な出版人・神村朝堅らの志のもと、この総合雑誌は在京のおきなわ社から六年間発行された。主要執筆者は、仲原善忠・金城朝永・比嘉春潮・奥里将建・東恩納寛惇・宮良当壮・島袋盛敏。

月刊文化沖縄社　発行（一九四〇年～一九四四年刊）

月刊 文化沖縄

全4巻・別冊1

別　冊＝解説（粟国恭子・近藤健一郎・世良利和・新城栄徳）・総目次（新城栄徳）・索引

体　裁＝B5判・A5判・上製・総1、616頁

推　薦＝仲程昌徳・阪井芳貴

揃定価＝本体98、000円＋税

本誌は一九四〇年に創刊され、一九四四年一月まで沖縄で刊行された雑誌である。創刊当初の編集発行人は本山豊、同人は本山豊・石川文一・金城安太郎の三人である。同時代では唯一の総合文化雑誌を目指し創刊した。全三八号を復刻。戦時下、一九四四年三月には首里に三二軍の司令部が置かれ、十・十空襲、一九四五年の沖縄戦で戦前に刊行された雑誌の多くも失われている。映画・演劇・舞踊・音楽といった芸能分野に本誌の特徴があるが、観光、移民情報、政治・経済、教育など、さまざまな領域に関わる記事を掲載していた。

八重山文芸協会／八重山文化社　発行（一九四六年～一九五〇年刊）

八重山文化

全3巻・別冊1

別　冊＝解説（三木　健）・総目次・索引

体　裁＝B5判・A5判・上製・総1、350頁

推　薦＝砂川哲雄・仲程昌徳・近藤健一郎

揃定価＝本体69、000円＋税

自治意識の高まりの中で活字文化の「黄金時代」を迎えた戦後の八重山で「地方文化の確立」を掲げて創刊した総合文化雑誌を復刻。戦後の混乱から復興へと向かい始めていた一九四六年五月、八重山文芸協会は旗揚げした。主な会員は、桃原用永、大濱信光、喜友名英文、村山秀雄、玻名城長輝ら二〇人余である。協会は活動の中心を『八重山文化』の発行に置き、会長に大濱、副会長に喜友名、編集長に村山を選出、会誌は小説や短歌、俳句などの文芸ものから時事評論や歴史ものなど、幅広い分野にまたがっている。

沖縄文化協会　発行（一九六一年～一九八三年収録）

沖縄文化

全8巻

解　説＝波照間永吉

体　裁＝B5判・A5判・上製・総4、608頁

推　薦＝我部政男・仲程昌徳

揃定価＝本体150、000円＋税

『沖縄文化』は、一九四七年八月に創設された沖縄文化協会の機関誌である。当誌は一九五三年の第二七号で休刊となったが、一九六一年に復刊し、現在に至る。沖縄文化協会は今日まで沖縄研究の柱として活動を進め、『沖縄文化』を通して沖縄研究の優れた成果を紹介し、多くの研究論文を収録してきた。それは「おもろさうし」研究をはじめ言語学、歴史学、人類学、考古学、宗教学、文学、芸術学と多岐にわたる。協会の協力のもと、復刊第一号から第六〇号までを復刻し、沖縄文化研究の基礎資料として供するものである。

琉球大学文芸部（琉大文藝クラブ）発行（一九五三年～一九七八年刊）

琉大文学

全5巻・付録1・別冊1

別　冊＝解説（我部　聖）・総目次・索引

体　裁＝A5判・上製・総2、556頁

推　薦＝小森陽一・新城郁夫・仲程昌徳・目取真俊

揃定価＝本体96、000円＋税

一九五三年七月、米軍の強い取り締まりの中『琉大文学』は創刊された。誌面で多くの同人がペンネームを使用していたのは、名前を秘することが必要な時代であったからだ。同人にとって、「米軍統治下の現実といかに立ち向かうか」が文学・思想上の大きな問題であった。「島ぐるみ闘争」、ベトナム戦争、そして高度経済成長に突き進む日本「本土」との間で「復帰」に向かう時代状況と切り結びながら文学表現を試みてきた。同誌と同時期に足跡を残した『前衛地帯』『沖縄文学』『サチュリコン』『原点』とともに復刻する次第である。

琉球政府　発行（一九五四年版～一九七一年版）

琉球要覧

全14巻

体　裁＝B5判・A5判・上製・総7、350頁

推　薦＝原洋之介

揃定価＝本体272、000円＋税（各巻分売可）

米国民政府による琉球政府設立の三年後にあたる一九五五年、琉球政府は『琉球要覧』を刊行する。本資料は「行政白書」の役割をもち、内容は土地・気象・人口統計・労働力調査・消費者実態調査・輸出入統計・犯罪統計・火災統計の「総括」から始まり、「政治」「財政金融」「産業」「教育」「社会」「建設通信」「労働」「治安」「文化・観光」まで沖縄に関するあらゆる事項を網羅したデータベースであり、占領下沖縄を知るための基礎資料である。

琉球政府　発行（一九五五年版～一九七二年版）

琉球統計年鑑

全14巻

体　裁＝B5判・上製・総6、786頁

推　薦＝原洋之介

揃定価＝本体294、000円＋税（各巻分売可）

琉球政府は一九五五年刊行の『琉球要覧』に続いて、一九五七年に『琉球統計年鑑』の刊行を始めた。統計の項目は、沖縄に関する土地・気象・人口・労働力・経済・諸産業・インフラ・貿易・通貨・金融・雇用・家計・教育・衛生・行政・治安・軍事等を主に、戦前の統計や諸外国の統計まで、『琉球要覧』では掲載されていない詳細な情報まで網羅した総合的統計年鑑である。また、途中から英語表記も追加され、外国人も閲覧が可能なようにされていた。

内容見本

▼第53・54合併号

祖納上村鍛冶遺跡に見る西表島の生活技術

～第一次発掘調査の出土遺物から～

大城　慧

一、はじめに

祖納上村は、西表島の中でも古見と並ぶ古い集落形態を残したところである。祖納半島一円が集落遺跡として位置づけられており、今に息づいている。この地が西表島の歴史の流れの中に深く関与してくる時期は、口碑伝説の中でも不確かな部分が多く、古文献の欠
て、その実体は長く深い緑
まれた状況にある。あまり
きすぎ、いつの時期に最初
れるようになったのかも明
このような中で口碑伝説
てくる人物が二人いる。そ
は村建ての中心となった大
という人物であり、あと一
城用緒である。

大竹祖納堂儀佐がいつの頃の時代に生きた人物であったのか、それを詳細に検討した記事は皆無に近い。

西表島に関する古い記録は十五世紀後半に書かれた「李朝実録」で、その中に記載された朝鮮人漂流記とされている。それ以後の記録をとどめるのはなく近世の時期をむかえる間、口碑伝説の時代とされている。

▼第77・78合併号

沖縄方言の散歩道

池宮正治

1　料理

程順則の家譜を見ると、康熙二六（一六八七）年二五歳のとき（この年の五月四年ぶりに中国留学から帰国している）、中国の蘇州の商船が本島中部の勝連間切浜比嘉に漂着、王府は早速語学の堪能な程順則と、順則の師匠筋にもあたる正議大夫鄭弘良大嶺親雲上らを現地に派遣して「事を料理」させている。この「料理」、むろん漂着民に料理をして食べさせた、と言う意味ではない。この語は、現在の中国語でも、うまく処理する意で

沖縄口には、面白いことに、今日我々が使う「料理」にぴったり見合う言葉がない。調理をする人には、ホーチューという。これは庖丁からきていて、どの家にもある調理用具の包丁と同じである。蛇足を加えると、この庖丁はもともとは「ほうてい」と読み、料理人の丁という、中国戦国時代の梁の恵王に仕えた料理の名人のことである。こうした料理人は立派な職業で、ホーチュー・比嘉（ヒジャー）とかホーチュー・新垣（アラカチ）といった具合に、名前に冠して使われ、それが現在屋号のようになっているところもある。摂政羽地王子尚象賢の仕

▼第69号

戦後沖縄のことば(3)

安仁屋政昭

引き揚げ

テレビや新聞で〝中国残留孤児〟のことが報じられるたびに、沖縄では太平洋諸島に遺棄してきた〝残留妻子〟が問題にされる。〝中国残留孤児〟というのは、日本人の子が、敗戦の混乱のなかで、〈やむをえない事情〉で中国に残されたものであるが、子どもの側からすれば遺棄されたと思うのは当然である。日本人は、これに涙するのであるが、実態はこれだけではない。日本人男性のなかにはアジア・太平洋地域で現地の女性と実質的な夫婦生活をいとなみ、敗戦時に妻子
に放置して帰国した者が多い。中
でも台湾でも、朝鮮半
ジア（南洋群島）でも
インドシナ半島でも
ガポールでも、南太
うやく実態が明らかに
の数は〝中国残留孤児
と推定されている。
言葉は、ある意味では

実態をカムフラージュするものであり、結果的に戦後処理の責任を放棄する口実ともなっている。今後も続く重い課題である。

敗戦後の海外引き揚げ者は、民間人が約三五〇万人、陸海軍人の復員が約三〇〇万人と言われている。敗戦後の数年間に、人口（約七二〇〇万人）の十％に近い人びとが帰還流入したわけで、日本の歴史にとって、かつて経験したことのないできごとであった。

沖縄でも、一九四五年十月から一九五二年末までに、沖縄本島を中心に、およそ十七万人の引き揚げ者を受け入れてい
る。これは、台湾や南洋群島やフィリピ

▼第87号

旧沖縄県鉄道の跡を歩く②

金城　功

1　消えた橋

四二、三年程前に、確か『北北西に進路をとれ』という洋画をみたようにある。妻と二人は、「北北西」ではなくして、「南東」から「南南東」へと進路を取ることになった。市外のバスターミナルを後にするとすぐに、国道三二九号が大きくカーブを描いて壷川方面へとのびているところに出る。カーブの辺りから県庁方面とターミナル入り口に道路が分岐している。分岐する辺りで「南東」から「南南東」へと進路を変更する。勿論鉄道の跡は確定し難い。県庁方面に通ずる道を横切ると、そこには新しい建物が

財産管理のために歩いているのではないので、少々軌条跡から外れていても歩く楽しみには一向に差し支えない。鉄道跡は確認出来ないので、国道三二九号の歩道を壷川方面に向けて歩く。

暫く行くと、国道三二九号に面してパチンコ店がある。その向かいから、かつてはハーバービューホテルの裏、「りゅうぎん健保会館」の前に通ずるカーブの多い道があったが、今は区画整理が進み新しい直線の道が取り付けられていた。所どころに旧道の跡が残っていた。頭にある前の町並と様変わりした現在の町並を重ねてみた。区画整理前まで残っていた軌条跡のコンクリートの橋は、新しい道の中に消えてしまっていた。国道から

地域と文化

【復刻版】全4巻・別冊1

◉原本発行＝南西印刷出版部（ひるぎ社）
◉原本発行年月＝1980年8月～1996年8月
◉体　裁＝B5判・上製・総1、984頁
◉別　冊＝解説（高良倉吉）・総目次・索引
（別冊のみ分売可＝本体1、000円＋税
ISBN978-4-8350-8056-7）
◉推　薦＝安里　進・大田静男
◉揃 定 価＝本体84、000円＋税
ISBN978-4-8350-8050-5
◉刊　行＝2017年7月
＊著作権者からの許可を得られず掲載できなかった箇所があります。

関連図書

山口栄鉄 著
英人バジル・ホールと大琉球
——来琉二百周年を記念して

体　裁＝四六判・並製・220頁
定　価＝本体1、900円＋税

かつて西欧中で起きた「琉球」大流行の軌跡を追う。一八一六年九月一六日、那覇港に姿を現した英軍艦船と琉球との友好的な交流を、著者の数々の業績を踏まえて多角的に紹介。

本書の「主な参考文献」、「文献索引」、「人名索引」はバジル・ホール研究入門の手引きとして活用されたい。

H・J・クリフォード 著／浜川 仁 訳・解説
クリフォード訪琉日記
——もうひとつの開国

体　裁＝四六判・並製・264頁・カラー口絵付
推　薦＝山口栄鉄・真栄平房昭
定　価＝本体1、800円＋税

新発見資料「幻の訪琉記」の全訳。一八一六年九・一〇月の英軍艦船訪琉は、バジル・ホール著『朝鮮・琉球航海記』が有名だが、同行していたクリフォード英国海軍尉官の訪琉記が、イギリスで浜川仁氏により発見された。バジル・ホールの『朝鮮・琉球航海記』を複眼的に見直す新資料であり、また二百年ぶりによみがえる感涙の物語である。

●表示価格はすべて税別。

不二出版
〒113・0023
東京都文京区向丘1・2・12
電話03・3812・4433
ファクシミリ03・3812・4464
振替00160・2・94084